論　文　ニダバ (*Nidaba*) 39(2010), 88-96

日本語の条件表現における使用できない「～れば」とアスペクト

Maher ELSHERBINI

1. はじめに

アラブ人日本語学習者にとって「～たら」、「～れば」、「と」、「なら」の使い分け（特に、それらの置き換え）は困難であると言われている。アラビア語に条件表現が少ないことが大きな原因であるとされる。そこで「～たら」、「～れば」、「と」、「なら」の使い分けが本当に困難であるかどうかを確認するため、アンケートを行った。アンケートの対象者は、筆者が所属するカイロ大学日本語学科のエジプト人学習者、日本語教師と日本人聴講生にしたが、その結果には驚かされた。条件を表す従属接続詞の使い分けはアラビア語を母語とする日本語学習者だけでなく、日本語が母語の者にとっても大きな問題であることが発見できたからである。「～たら」、「～れば」、「と」、「なら」の使い分けは十分明確ではない点もあるが、その中でも、最も誤用を起こしやすいものは「～れば」である。特に、「～たら」を使用しなければならない場合に、「～れば」を使用してしまうことが多い。また、「～たら」、「～と」、「なら」に比べると、「～れば」は使用出来ない場合も多い。できれば、これらの従属接続詞全てを研究したいが、原稿枚数に制限があるので、本稿では研究テーマを「～れば」のみに絞ることにした。目的はアスペクト[1)]の視点から、条件表現において使用できない「～れば」を十分に明確にすることである。すなわち、これができれば、使用できる「～れば」を十分に明確にすることができるということである。

2. 使用できない「～れば」

「～れば」は「使用できないもの」と「使用できるもの」の二つに分けられるが、本稿では、使用できない「～れば」を取り上げる。さらに、使用できない「～れば」を「アスペクト的・ムード的なもの」と「アスペクト的なもの」の二つに分ける。また、「～れば」を用いる文は複文なので、複文を前節と後節の２節に分けておく。

2.1. アスペクト的・ムード的なもの

この 2.1. に挙っている用例の前節では「～れば」と結合する動詞はアスペクト的に動作性動詞[2)]でありながら、後節で表される「命令」、「依頼」、「勧誘」、「義務」、「意志」、「義

務」、「禁止」、「許可」、「忠告」、はムード的なものである。しかし、大抵、動作性動詞はムードを表すために使用できないので、その用例は成り立たない文となる。たとえば、例 1)の前節には「帰宅する」という動作動詞があるが、後節には「うがい」という動作＋「～なさい」という「命令」がある。つまり、前節はアスペクトのみであるが、後節はアスペクト＋ムードである。後節の「動作（うがい)」と「命令（～なさい)」が実現されるためには、前節の「動作（帰宅)」が実現されなければならない。しかし、例 1)の「～れば」はアスペクトが欠けているので、前節で「動作性動詞＋～れば」を使った複文は作れない。つまり、 前節は「動作性動詞＋～れば」以外（例えば「動作性動詞＋たら」）であれば、複文が作れる。「～たら」は「～た＋ら」から成っているが、その「た」はアスペクトの完了[3] を表す。まず、「帰宅」という動作が行なわれ、その後、「うがい」という指示が行なわれるということである。したがって、例 1)の「～れば」を「～たら」で置き換えれば、前節はアスペクト（完了）を持つようになるので、例 1)は複文として成り立つ。例 2)～例 16)も例 1)と同様である[4]。

1) ×帰宅すれば、必ずうがいをしなさい。「命令」（庵, p. 222）
2) ×講師の先生が来れば、すぐに手を上げて質問しなさい。「命令」（蓮沼, p. 5）
3) ×京都へ行けば、石庭を見に行きなさい。「命令」（鈴木, p. 218）
4) ×東京へ来れば、知らせてください。「依頼」（鈴木, p. 219）
5) ×先生に会えば、よろしくお伝えください。「依頼」（森田, p. 456）
6) ×かぜをひけば、この薬を飲んで下さい。「依頼」（鈴木, p. 218）
7) ×午後になれば、散歩に行きましょう。「勧誘」（庵, p. 222）
8) ×テレビが始まれば、見ましょう。「勧誘」（吉川, p. 210）
9) ×家に帰られば、すぐに手を洗わなくてはいけません。「義務」（森田, p. 456）
10) ×大阪へ行けば、すぐ友だちに電話をかけよう。「意志」（鈴木, p. 219）
11) ×明日来られば、先生の部屋に寄ろう。「意志」（蓮沼, p. 19）
12) ×京都へ行けば、先輩のところへ行こう。「意志」（鈴木, p. 218）
13) ×二、三分たてば、ふたをあけて水を足さなければならない。
「義務」（蓮沼, p. 19）
14) ×向こうに着けば、すぐバンガローをさがさなければなりません。
「義務」（鈴木, p. 2241）
15) ×ここへ来れば、見てはいけません。「禁止」（吉川, p. 210）
16) ×都会に引っ越せば、カルチャーセンターで何か習ってもいいよ。
「許可」（蓮沼, p. 5）

例 1)～例 16)の前節の内容が行なわれてから、後節の内容が行なわれるなら、「～れば」

は使用できたが、それがなかったので、「～れば」が使用できなかった。しかし、例 17)～例 19)では後節の内容が行なわれてから、前節の内容が行なわれるのが通常の順番であるが、例 17)～例 19)の「～れば」はアスペクトが欠けているので、前節の内容が行なわれるかどうは明確ではない。そのため、「～れば」が用いられている前節では複文が成り立たない。つまり、後節のアスペクト（動作の「支度」）＋ムード（忠告の「～たほうがいい」）が先ず実現され、それから前節のアスペクト（動作の「出発」）が実現される順番である。したがって、「～れば」が入った前節では複文は成り立たないが、「～れば」を「なら」に置き換えると、前節はアスペクトを持つようになり、複文が成り立つ[5]。

17)×朝早く出発すれば、今晩のうちに支度をしておいたほうがいいです。
「忠告」（鈴木, p. 234）
18)×経済の勉強をやれば、あの大学がいいですよ。「忠告」（鈴木, p. 234）
19)×電気製品を買えば、秋葉原の店が安いですよ。「忠告」（鈴木, p. 234）

例 20)の「決めれば」は「決める」＋「～れば」であるが、成り立たない複文である。前節と後節の動詞は同じ動詞であるが、前節の動作性動詞が完了なら、後節で同じ動作を実現するように依頼する必要はない。前節の動作性動詞が未完了[6]であれば、後節でそれを実現するように依頼する意味がある。そうなるように、「～れば」を「なら」で置き換えるべきである[7]。

20)×決めれば、早く決めてください。

また、例 21)～例 23)には「もし」が存在しているが、「もし」は意味を弱くする機能がある。しかし、例 21)の「出発しましょう」は勧誘の強い意思を表す。また、時間も 10 時とはっきり決まっている。例 22)と例 23)には強い推量を表す「でしょう」が存在している。例 23)には、強い推量も示す「思う」がある。意味を弱くする機能を持っている「もし」は強さを表す「しましょう」、「でしょう」、「思う」にふさわしくない。「もし」が存在していなければ、例 21)～23)の複文は成り立つのである。

21)×もし、10 時になれば、出発しましょう。「勧誘」（庵, p. 212）
22)×もし春になれば、暖かくなるでしょう。「推量」（蓮沼, p. 2）
23)×もし、二，三時間がたてば、雨も上がると思います。「推量」（蓮沼, p. 2）

2. 2. アスペクト的なもの

2. 1. では、アスペクト的・ムード的側面から成り立たない複文を取り上げたが、2. 2. で

は、アスペクト的側面のみから成り立たない複文を取り上げる。この後者は、後節の動詞形から「～た」形と「～る」形の二つに分けることができる。

2.2.1.「～た」形

例 24)～例 27)の複文文末動詞は「～た」形で終わって、完了を表しているが、24)～27)の後節での「完了」は「完了した動作は予想以外の動作であったニュアンス」を与えている[8]。このような「完了」を「予想外完了」と呼ぶことにする。

動詞「ある」は状態性動詞[9]であるが、例 26)の動詞「ある」は「起こる」または「起きる」を意味するので、動作性動詞であると考えられる。

例 24)～例 27)の前節の「～れば」はアスペクトが欠けているので、成り立たないが、「～れば」を「～たら」に置き換えると成り立つ。

24)×昨日、大阪へ行けば、旧友に会った。「予想外完了」(東中, p. 135)
25)×魚を買えば、腐っていた。「予想外完了」(田中, p. 62)
26)×夕べ、お風呂に入っていれば、地震があった。「予想外完了」(富田, p. 200)
27)×寮へ帰れば、先輩が来ていた。「予想外完了」(鈴木, p. 220)

しかし、「～れば」を「～たら」または「と」に置き換える複文もある。たとえば、例 28)と例 29)の「～れば」を「と」に置き換えると、焦点は「順番」に当たるようになる。「～たら」に置き換えると、焦点は「アスペクト」に当たるようになる。

28)×コインを入れれば、切符が出てきた。(吉川, p. 214)
29)×大そうじをすれば、お父さんの大きな登山ぐつが出てきた。(鈴木, p. 221)

また、例 30)のように同一動作主が連続動作をした場合、複文が成り立たない。このような場合、動作の順番を表す「～て」形のような形を使うことが自然である。そのため、「～れば」を「～て」形に置き換えると、複文が成り立つ。

30)×男は鍵を取り出せば、ドアを開けた。「完了」(蓮沼, p. 35)

2.2.2.「～る」形

この「～る」形については「マイナス真理」、「確実完了」、「反復」、「疑問」、「状況設定」の五つに分けて説明する。

2.2.2.1. マイナス真理

例 31)～34)のように、前節はマイナスの手段であり、後節はマイナスの結果である場合、「～れば」が使用できない。たとえば、例 31)の前節の「ご飯をたくさん食べること」も後節の「体が太ること」も健康には良くないことであるので、マイナスである。「ご飯をたくさん食べること」はマイナスの手段であるので、マイナスの結果の「体が太ること」に通じた。このような関係は因果である。しかし、例 31)と例 32)の前節にはマイナスの意味がはっきり現れているが、例 33)と例 34)では、後節から、前節の意味がマイナスであることがわかる。例 33)では、後節の「会議に遅れること」は前節の「11 時の新幹線に乗ること」が原因であるので、前節の「11 時の新幹線に乗ること」がマイナスである。また、例 34) の「もっとお腹が痛くなること」は前節の「この薬を飲むこと」が原因であるので、前節の「この薬を飲むこと」がマイナスである。

アスペクト的には、例 31)～例 34)で「～れば」が使用できないのは、前節のアスペクトが欠けているからである。前節の動作が後節の動作より先に起きることは明確でないので複文は成り立たない。もし、「～れば」が前節の動作の方が先に起きるかどうかを表していたら、複文は成り立った。しかし、「～れば」を「～たら」に置き換えたら、複文としては「真理」[10] を表すようになる。例 31)～例 34)は、ニュアンスの側面からは「マイナス」を、アスペクトの側面からは「真理」を表すので、「マイナス真理」と呼ぶことにする。「マイナス真理」の場合、「～れば」が使用できない。

31)×ご飯をたくさん食べれば、体がふとります。(鈴木, p. 218)
32)×暗いところで本を読めば、目が悪くなってしまうよ。(蓮沼, p. 6)
33)×11 時の新幹線に乗れば、会議に遅れてしまうよ。(蓮沼, p. 6)
34)×この薬を飲めば、もっとお腹が痛くなりますよ。(蓮沼, p. 9)

2.2.2.2. 確実完了

動作主は、未完了である動作が確かに完了になるということを示す場合、「～れば」が使用できない。例 35)の前節の「向こうに着くこと」も後節の「電話すること」も「未完了(動作開始以前)」であるが、動作主は未完了である「向こうに着くこと」が確かに完了になるということを示したい。このような「確かに完了になる未完了」を「確実完了」と呼ぶ。例 35)の「～れば」はアスペクトが欠けているから、確実完了の場合は使用できないが、代わりに「～たら」なら使用できる。例 36)も同様である。

35)×向こうに着けば、電話します。(東中, p. 135)
36)×家に帰れば、この CD を聞きます。(東中, p. 135)

2.2.2.3. 反復

ある動作が完了した場合、いつも他の動作が反復される事例である。たとえば、例 37)では前節の動作の「彼はお金がなくなる」が完了した場合、後節の動作の「私の家にお金を借りに来る」が「いつも」繰り返される。「～れば」はアスペクトが欠けるからそのような場合に使用されないが、「～たら」または「と」が使用される。「～たら」は条件の「～た場合、いつも～る」を表すが、「と」は「動作の順番」に焦点を当てる。

37)×彼はお金がなくなれば、いつも私の家にお金を借りに来る。(庵, p. 213)

2.2.2.4. 疑問

前節が「～れば」で終わっていたら、後節で疑問語が使用できない。たとえば、38)での前節は「辞書をひくこと」が「～れば」で終わり、後節は疑問節である。アスペクト的に前節の動作と後節の動作は未完了であるが、前節の動作が起こらなかったら、後節の動作が起こらない。つまり、後節の動作が起こるため、先ず、前節の動作が起こる条件になっている。前節の動作が起こらなかったら、疑問である後節の回答がわからない。従って、例 38)と例 39)では、「～れば」はアスペクトが欠けているから、使用できないが、「～たら」または「と」に置き換えると、複文が成り立つ。

38)×この辞書をひけば、何がわかりますか。(蓮沼, p. 4)
39)×こうすれば、どうなりますか。(蓮沼, p. 20)

2.2.2.5. 状況設定

単なる状況を設定する場合、「～れば」が使用できない。たとえば、例 40)では、前節の「この道をまっすぐ行くこと」は未完了であるが、後節の「右手に白い建物がある」はアスペクトの「状態（特に、現在の状態)」である。前節の「この道をまっすぐ行くこと」は後節の「白い建物」を見つけるための前提である。従って、例 40)では、「～れば」はアスペクトが欠けているから使用できないが、「～たら」または「と」に置き換えると、複文が成り立つ。「～たら」の場合、焦点は後節の動作に当たるが、「と」の場合、焦点は動作の順番に当たる。

40)×この道をまっすぐ行けば、右手に白い建物がある。(蓮沼, p. 19)

3. 結語

以上で、使用できない「～れば」を「アスペクト的・ムード的なもの」と「アスペクト的なもの」の二つに分けた。さらに、「アスペクト的・ムード的なもの」を「命令」、「依頼」、

「勧誘」、「義務」、「意志」、「義務」、「禁止」、「許可」、「忠告」に分けた。また、「アスペクト的なもの」を「～た」形と「～る」形に分けた。さらに、「～た」形を「予想外完了」、「同一動作主連続完了」に分けた。そして、「～る」形を「マイナス真理」、「確実完了」、「反復」、「疑問」、「状況設定」に分けた（表１）。

以上、使用できない「～れば」について明らかにしてきた。これは言い替えれば、使用できる「～れば」を十分に明確にすることができたということである[11]。

注

1) アスペクトとは事象（動作または状態）の時間的な内的構成を示す文法カテゴリーであり、動詞あるいは副詞などによって示されるものである。事象は動作または状態を示すものである。

2) 動作とは「動きのあること」である。

3) 完了とは「完全に終わったこと」である。

4) 当然、緊急時の文には「～れば」が使用できない。それは前節の内容が必ず実現された後、後節の内容が実行されるので、「～たら」のみ使用される。たとえば、
×地震が起これば、すぐ火を消してください。（富田, p. 228）
×火事になれば、すぐ消防署に電話してください。（富田, p. 228）
×どろぼうに入られれば、すぐ警察に連絡してください。（富田, p. 228）

5)「なら」の前には動詞を「～る」形に直す必要がある（出発すれば→出発する、やれば→やる、買えば→買う）。

6) 未完了とは「動作がまだ完了していないということ」を指すものであるが、その動作が始まったがまだ完全には終わっていないとの二つの解釈が可能である。

7) しかし、「動作性動詞」＋「動作性動詞＋ムード」の複文のすべてが成り立たないというわけではない。たとえば、次例は「動作性動詞」＋「動作性動詞＋ムード」の複文であるが、成り立っている。
読みたければ、読んでみなさい。（前田, p. 490）
行きたければ、どこでも行きなさい。（鈴木, p. 218）
帰りたければ、さっさと帰れ。（森田, p. 297）
食べたければ、食べてもかまわない。（鈴木, p. 218）

8) しかし、そのようなニュアンスを与えない複文もある。たとえば、例 28)の動詞も動作性動詞で、「完了」を表すが、「予想以外の動作であったニュアンス」を与えない。そのような完了を「客観的完了」と呼ぶことにする。
×クーラーをつければ、涼しくなった。「完了」（東中, p. 135）

9) 状態とは「動きのないこと」である。

10) 真理とは「自然的な決まりのこと」であり、時の分割（過去、現在、未来）を超えた

ものである。

11)　基本的に複文は二つの単文からなっている。二つの単文にはそれぞれアスペクトがあるべきである。しかし、一つの単文のアスペクトが欠けている場合、アスペクトは一つのみになり、複文は成り立たなくなる。行なったアンケートによると「～たら」、「と」、「なら」の場合、二つの単文にはそれぞれアスペクトがあるが、「～れば」はアスペクトが一つしかない場合が多かった。したがって、「～れば」が使用できない原因は前節のアスペクトが欠けていることにあると筆者は考える。

また、「～れば」は論理上の出来事を表す。つまり、話者はある特定のことを予定はしていないが、あることが起こった場合には、ある行動をするとする。しかし、これは逆のことが起こった場合、逆の行動をすることを表す。たとえば、「雨が降れば、行かない」と述べた人は「雨が降ること」を予定はしていないが、論理上の話をしている。もし雨が降ったら行かないが、降らなかったら行くということである。そうすると、確実完了の場合、「×向こうに着けば、電話します」は、「向こうに着かなければ、電話しません」ということになってしまい、意味が確実完了を表さなくなって、複文として成り立たなくなる。

「～たら」の「た」は完了を表す。また、「と」または「なら」の前には、アスペクトの表示（例.「～た」形、「～る」形、「～ている」形、「～ていた」形）が置かれる。しかし、「～れば」の「れ」または「ば」はアスペクトと関わりを持つものではない。

アスペクトを表す必要がある場合、アスペクトが欠けている「～れば」を使用したら、複文は成り立たない。本稿の用例では、アスペクトが欠けている「～れば」が使用されたので、複文は成り立たなくなったのである。

用例出典

庵功雄 2001『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
鈴木忍 1978『教師用日本語教育ハンドブック③文法１』国際交流基金
田中稔子 1990『日本語の文法』近代文芸社
富田隆行 1993(第３版)〔1991初版〕『基礎表現50とその教え方』凡人社
蓮沼昭子 2001『日本語文法セルフマスターシリーズ７条件表現』くろしお出版
東中川かほる 1996『独立で学べる日本語文法』凡人社
前田直子 1995「バ、トナラ、タラ」『日本語類義表現の文法』くろしお出版
森田良行 1988『日本語の類意表現』創拓社
吉川武時 1989『NAFL 選書６日本語文法入門（下)』アルク

参考文献

稲葉みどり 1991「と、ば、たら、ならの用法の調査とその結果」『日本語教育』75 号
ELSHERBENY,Maher 1991「現代日本語アスペクトの研究の現状」『ニダバ』第 20 号
久野暲 1973『日本文法研究』大修館書店
豊田豊子 1985「と、ば、たら、ならの用法の調査とその結果」『日本語教育』56 号
中島悦子 1990「と、ば、たら、ならの用法の調査とその結果」『日本語教育』75 号
蓮沼昭子 1985「ナラとトスレバ」『日本語教育』56 号
〃　2001『日本語文法セルフマスターシリーズ 7 条件表現』くろしお出版
益岡隆志 1993『日本語の条件表現』くろしお出版
水谷信子 2001『続日英比較話しことばの文法』くろしお出版

表 1

使用できない「～れば」

<table>
<tr><td>アスペクト的・ムード的なもの</td><td colspan="2">命令
依頼
勧誘
義務
意志
禁止
許可
忠告</td></tr>
<tr><td rowspan="2">アスペクト的なもの</td><td>「～た」形</td><td>予想外完了
同一動作主連続完了</td></tr>
<tr><td>「～る」形</td><td>マイナス真理
確実完了
反復
疑問
状況の設定</td></tr>
</table>